

石木ダム建設事業についての意見

野口正人

長崎大学名誉教授

元 川棚川水系河川整備計画検討委員会
委員長

1 はじめに

約20年前に「川棚川水系河川整備計画検討委員会」で河川整備計画を検討し、石木ダム建設を含む「提言書」を当時の金子原二郎知事に提出して以来、その行方に大いに関心を抱いてきました。当方は、その後まもなく、長崎大学を定年退職しましたが、退職後も微力ながら「安全で安心な街づくり」に資するための活動を続けてきました。その一つとして、「長崎大学留学生教育・支援センター」（現在のグローバル機構、国際教育部門）において「日本の伝統文化」の一コマとして「水との暮らし in 長崎」と題した講義を行ってきました。今年は講義を始めてから10年目に当たることでもあり、同センターの紀要に論文を投稿しました。論文は、『「水との暮らし in 長崎」を担当して感じた講義の難しさ』と題して書かれていますが、流利的には、様々な努力にも拘わらず洪水被害が無くならないことをどうにかしたいとの思いで記述がされています。

2 意見

A 川棚川水系河川整備計画検討委員会を経験した立場から

官製の委員会がその委員構成で絶えず批判を浴びますので、委員会の委員構成をどのようにするのかの準備会議から始め、委員就任希望者に向けて公募もされたことを、まず記させて戴きます。委員会は公平・中立の立場で運営され、討議において委員間に意見の違いもありましたが、最終的には構成委員の総意として「提言書」がまとめられ、前述されたように長崎県知



図-1 川棚川水系流域概要図 1)

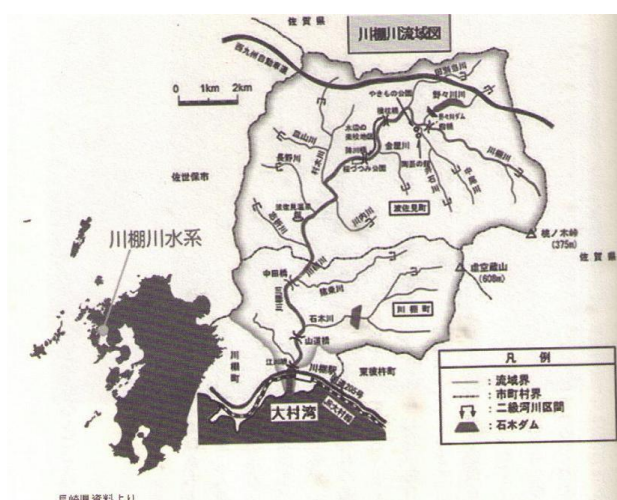


図-2 川棚川流域図 2)

1)長崎県(2005):川棚川水系河川整備基本方針, 2) 石木ダム建設絶対反対同盟・石木ダム問題ブックレット編集委員会(2014) 編:小さなダムの大きな闘い -石木川にダムはいらない!,花伝社.

事に提出されました。委員長であった当方は極力自分の意見を申し上げることを控え、委員全体の意見がまとめられることを優先して委員会運営を行いました。そのようなことを考慮すれば、委員会ですべてまとめられた「提言」を基にして策定された「川棚川水系河川整備計画」の内容について、その後の過程において特段の瑕疵は認められておらず、遅滞しながらも早急に計画が実現することを強く望んでいます。

また、それこそが民主的手続きに適うものであり、「河川整備計画」の方針に沿って「苦渋の選択をされ、ご協力戴いている」関係者への務めでもあろうかと思っています。

B 「健全な水環境」の実現をめざして微力を尽くしている一長崎県民の立場から

今回の「有識者の意見を聞く場」への参加が濃厚になった段階で、どのような意見が述べられるかと自問自答しました。持ち時間が限られていることでもあり、なかなか考えがまとまることはありませんでした。

I. 川棚川水系での河川整備は、それ程、特異なことなのだろうか？

II. 「流域治水」の大切さは、何も最近新たに分かったことではなく、先人がその遂行に弛まない努力を積み重ねてこられた。

III. 虚空蔵山の懷に抱かれた地域は本当に素晴らしいのに、何故、このようなことになっているのだろうか？

上記の問などが脳裏を駆け巡り、そのようなことについて皆が忌憚のない意見を出し合えば、議論ももう少し生産的になるのではないかと考えたりもしました。ここでは、時間の制限もあり、IIIの問に答える方向で資料を作成しました。

最初にお断りしておきますが、当方は「石木ダム建設の是非」について簡単に正解が得られるとは思っていません。尤も、だからこそ知事さんもお困りなのは重々承知していますが・・・。

そして、ダムが建設されれば水没する家屋の方々の大変さは察して余りあるものと思っています。同時に、石木ダム建設絶対反対同盟の方々が作られている「石木ダム問題ブックレット」などに目通しさせていただくと、「「蛍の里」に限らないであろうが、自然の良さを守りたい」、「生活していくうえで町にも近く、それほど不便を感じていない」、「素晴らしい環境を子供達、次の世代に伝えていきたい」等々、いずれもが至極当然のことで、そのことに異を唱える気持ちは全くないことを記させていただきます。

ただ、杞憂になればそれに越したことはないのですが、『そのような“もっともな望み”が「石木ダム建設」の行方だけに左右されるほど、世の中は甘いものなのだろうか？』といった素朴な疑問を抱いてしまうのです。

このような疑問に答えを出すべく、「川棚川水系河川整備」のことながら、石木川周辺の生活環境、社会環境を「虚空蔵山麓経済圏」の観点から考察してみようと考えました。

- 1) 虚空蔵山とその周辺地域 (図-1&2, 参照)
- 2) 交通の大動脈と社会の変化 (図-3&4)
- 3) 各自治体の生き残り戦略 (図-5&6)
- 4) そして、「石木ダム建設」の行方 (図-5)

1)~4)に係る詳しい記述は省かせていただきます。そのような標題を並べさせていただいた当方の意図がお分かりの方には、「石木ダム建設の有無」がある種、川棚町の命運を左右し兼ねず、併せて、ダム建設問題はその事だけで議論されるような話ではなく、「新幹線延伸問題」や「少子高齢化、人口流出問題」等々の多くの重要な県政の課題とリンクしていることに思いが至るものと考えています。

水が関係している案件において、理想と現実との溝を埋めるのが大変なことは今に始まったことではありません。本資料の図-5, 図-6などは、その図を眼にした方に少しでも対象水域での課題に関心を持っていただければとの願いの下に作成されました。すなわち、図-5は、石木ダムが建設されれば、いくらでも夢が膨らんでいく「虚空蔵山麓経済圏」の在り様如何で、B/Cの値も飛躍的に大きくなるでしょうし、人口流出に歯止めをかける妙案も創出されるのではないかとポジティブ（積極的）な希望を抱いて作成されました。図-6は丁度公刊されたばかり



図-3 波佐見へのアクセス 3)



図-4 虹色佐賀の観光地図 4)



図-5 「虚空蔵山麓経済圏」の発展



図-6 「水工交流の道」倭から百済へ⁵⁾

の当方の論文からの引用ですが、長崎大学のホームページでも閲覧が可能ですので、お目通しいただければ幸甚に存じます。

3 おわりに

お気づきの方がおられるかもしれませんが、図-5 を作成しながら、京都嵐山地区のことを強く意識しはじめました。誰もが良く知っている「京都(市)」の最高峰は比叡山ではなく、愛宕山なのですが、その霊山を北に控えて嵐山があり、桂川に渡月橋が架かっていることは、意識するしないに拘わらず多くの方が、テレビ画面で眼にされたことのある風景です。

渡月橋の昔の名前が「法輪寺橋」で、近くにはその名前の由来になった「虚空蔵大菩薩」を祀る法輪寺があります。京都の町の人々（そして、全国から訪れる人）は数えて 13 歳になった時に知恵を授けて貰うために「十三まいり」と称してお寺にお参りに行きます。蛇足ながら、ルールを守らないと折角得た知識も消えてしまいますので注意が必要です。

寺の眼下には桂川（別名：保津川、旧名：葛野川、大堰川、大井川）が流れ、保津川下りやトロッコ列車に乗った観光客で溢れた人波が見えます。もちろん、そのような川の上流にはそれらの観光地を護るようにして建設された日吉ダムがあり、昔には世木ダムも造られています。いまでは、インバウンドの客が多過ぎて、贅沢な悲鳴も聞こえてきそうですが、これらのいずれもが、往時、角倉了以・素庵親子が保津川や高瀬川の開削を行ったことに始まっています。付け加えれば、桂川、旧名葛野川には秦一族により「葛野大堰」が造られており、京都市西京区をはじめとした多くの地域の農地に灌漑用水を供給し、町の発展に貢献しています。図-6 が示す時代、そして更に古いわが国草創の歴史時代の話ですが、それもこれも『**一步を踏み出す精神**』に基づいていることは論を待ちません。

最後に、ダム建設問題といえば最近では、八ツ場ダム、大滝・大迫ダム、川辺川ダム等々の建設事情が直ちに思い出されます。それらをルポルタージュ風にまとめた本もいくつか出版されていて、ダム建設に伴う懸念事項もいくつか指摘されています^{6,7)}。ただ、どのような方策を講じて「絶対安全」という状態が保証されないことは理解しておく必要があります。如何なる構造物でも防災対象の確率規模が存在し、その限界を越えた場合には被害が最小になるように段取りしておかねばならないことは当然です。そのようなことのひとつに、降雨が想定を超えた時の「ダムの緊急放流」がありますが、これなども人間の英知で被害を小さくするように対応しようとするのか、或いは、ダム建設のメリットを認識しながらも建設を止めようとするのか、いずれの判断が正しいのかについて簡単に正解が求められる筈ありません。何にでも全員一致で物事が決められればそれに越したことはないのですが、なかなかそうはいかないので、今回のような事態になったりします。

このような記述はしないでおうとしたのに、そうはならず反省しています。「石木ダム建設問題」に関して、この種の当り前の手続きをする段階はもう十分に過ぎているのではないかと言うのが当方の思いです。（勿論、これからが本番ではあります。）

「小異を捨てて、大同につく」という諺があります。尤も、そのようにだけ記すと誤解を招きかねませんが、もちろん、「少数意見をも尊重しつつ、その違いを乗り越えて、大同団結することが大切である」との意味であることは言うまでもないことです。

以上

◎嵐山の様子



写真-1 桂川上流の日吉ダム



写真-2 蛇行する保津峡谷



写真-3 愛宕山を遠くに望む渡月橋



写真-4 法輪寺（京都嵐山）

参考文献

1)&2) 前出

3) 波佐見町役場(2025): 波佐見町散策マップ, 波佐見町.

4) 佐賀県観光連盟(2023): 虹色佐賀の観光地図, 佐賀県観光連盟.

5) 野口正人(2026): 「水との暮らし in 長崎」を担当して感じた講義の難しさ, 長崎大学留学生支援・センター紀要第 18 号.

6) 浅野詠子(2017): ダムと民の五十年抗争 紀の川源流村取材記, 風媒社.

7) 相川俊英(2020): ハツ場ダムと倉渕ダム, 緑風出版.

なお、図-5 に関連して、以下の資料をも参照したことを記します。

8) 東彼杵町(2026): 広報ひがしそのぎ 5月号.

9) 石木ダムに関する長崎県資料

そして、図-5 の残りの写真は嬉野温泉での写真を除いて、当方が今回新たに現地を訪れて撮ったものです。

図-6 にはめ込まれた写真に関しては、参考文献 5)から引用された次の説明を参照してください。

『ここでは、「水工(みずたくみ)交流の道」とも称したいルートを図-6 に示し、「健全な水環境」(Sound and Sustainable Water Environment) を創造していくうえで、関心を寄せたい史跡などを写真とともに数個所示した。ちなみに、写真が撮られた場所は、①箸墓古墳、南郷遺跡の案内板、狭山池、②鬼ノ城西門、小田川と高梁川との旧合流点、③水城跡、④金田城跡の案内板、⑤霊岩チャラボン古墳、⑥白村江、(a) 阿用川、(b) 石碑(横田切れ)、(c) 福束輪中堤、である。』(出典: 野口正人; 「水との暮らし in 長崎」を担当して感じた講義の難しさ、長崎大学留学生教育・支援センター紀要、第 8 号、2026.)

(2026.7.12)